



Good News for Japan

とぎのこえ



年の初めに思う

勝地次郎

新年明けまして

おめでとうございます。

新しい年を迎えると、お互いにそのように挨拶を交わします。しかし、「門松や、冥土の旅の一里塚 めでたくもあり、めでたくもなし」と詠んだ人がいました。その幼少期が「とんちの一休」として知られる一休禪師です。彼は、室町時代に活躍した臨済宗の僧侶でした。正月に立てる「めでたい門松」も、年を重ね、次第に死に近づく「一里塚」であると説いたと言われています。これは、不吉の予告というよりは、むしろ、年の初めであればこそ、死を思い、生を思うことを奨めたものと言えるでしょう。あなたは、あなたの人生に何を思つて新年を迎えたでしょうか？

今年(ひょうねい)は羊年(ひつね)です。羊は牛や馬とは異なり、日本人には馴染みのない動物ですが、聖書の中では、人間がどのような存在であり、どのように生きるべきかをよく示している動物なのです。

旧約聖書に登場するダビデ王は、その晩年、自分の人生を振り返って、こんな詩を作りました。

「主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ 憩いの水のほとりに伴ひ 魂を生き返らせてくださった。」

(詩編23編1-3節)

彼は自らを羊と捉え、人生を導き、守つてくださった主なる神は、羊飼ひであると告白しています。羊は、迷いや弱く弱い動物で、猛獣に襲われたら、なすすべもなくその命を失わざるを得ない存在です。勇猛果敢な武将であったダビデは、なぜ、弱い動物の代表的存在である羊に、自らを重ねたのでしょうか？

ダビデは少年時代、羊飼ひをしていました。そのため、心の中できつと思つていたことでしょうか、「私がかつて育てていた羊たち。あれは私の姿だ。神の導きと守りがなければ決して生きることはできなかつた私の姿がそこにある」と。羊飼ひから王にまで昇りつめた彼の人生は、まことに波乱万丈(はらんばんじゆう)でした。栄華を極めた時があり、わが子であるアブサロムの反乱に遭

い、戦わざるを得なかつた失意の底に沈んだ時がありました。生涯を振り返り、それらの一つ一つが走馬灯(そうまとう)のように心に映し出されたことでしょうか。自分ひとりでは決して生き得なかつた人生に注がれた神の恵みを思つていたに違いありません。

自らを羊であるとしたダビデは、羊であればこそ受け得る究極的な恵みについて、このように告白しています。

「死の陰の谷を行くとときも わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。」

(詩編23編4節)

「死の陰の谷を行く」ときは、すべての人が経験せざるを得ない「死の時」を象徴しています。生まれし者は必ず死す、これが自然界の法則です。しかし、暗黒とも思える死に対しても、「災いを恐れない」と告白できる恵みをダビデは得ていたのです。

ある人の言葉です。「人生の厳しい経験において、友

人や愛する者たちは長い道を我々と共に歩いてくれる。しかし、天の牧者(羊飼ひ)のみが最後まで共に行くことができる。……死の陰の谷を通つて行く時に、このことはとりわけ真実である。」

一人で生まれ、一人で死に行く人生。しかし、天の牧者たる神が共にいてくださり、永遠の命へと導いてくださる。だからこそ、死の陰の谷を行く時にも恐れることはないのです。

新約聖書にこのように記されています。

「神は、その独り子(イエス・キリスト)をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

(ヨハネによる福音書3章16節)

あなたも、神の独り子イエス・キリストを信じることによって、この年の初めに「永遠の命に至る一里塚」を見いだすことができるのです。天の牧者である神の導きをお祈りいたします。

(救世軍士官「伝道者」司令官

謹んで震災のお見舞いを申し上げます。

一日も早い被災者の方々の心の平安の回復と、被災地の復興をお祈り申し上げます。



イエス様が私を変えてくださったいました

藤原忠重

街頭生活に至るまで

私は、愛媛県の教会もない小さな町で六人兄弟の長男として生まれました。十七歳の時に大分に引越し、潜水夫に四年間弟子入りし、十二年間潜水夫として各地で働きまわりました。サラリーマンの十倍の収入にもかかわらず、すべて遊びに使い切っていました。二十五歳で結婚。子どもも授かりましたが、単身赴任ばかり。妻には給料も、十分の一しか送っていませんでした。腰を痛めたので潜水夫を辞め、鉄鋼関連工事の会社を友人と立ち上げ、責任者として全国各地の現場に出ました。その後、色々あってそこは辞めました。腕を買われ、各地の工事現場で仕事をしました。年一回の表彰を会社ではなく、個人でもらったこともありましたが、ただ、人をまとめる仕事は精

神的にとても厳しい毎日でした。やがて、給料で差別されたのに嫌気がさし、九月末に前月の給料をもらおうと、すぐに仕事を辞めてしまいました。五十六歳でした。ちょうどその七カ月前、離婚していたので、働くのがばからしくもなっていました。

何も考えず東京駅へ来たものの、もらった給料を半月で使い切り、東京駅周辺で街頭生活となりました。知り合った人に助けられ、食べ物に困ることはなかったけれど、人間関係のトラブルの中で、自分の命はどうなつてもいい」という心境でした。

「愛し合いなさい!」

初めての冬を迎える十一月、誘われて救世軍の街頭生活者支援に並びました。ずっと着の身着のままだったので、衣類が本当に助かりました。その時、「神様の愛」、「互いに愛し合いなさい」と、背の高い男性がマイクで語る言葉が聞こえました。(互いに愛し合いなさい? 何言ってるんだ?) 「愛」と言えば男女のどろどろの愛しか思い浮かばないので、こそばゆくなりました。その冬中、救世軍の支援活動で、度々「愛」の話をする背の高い人を見ていました。

銭湯の先に救世軍が……

当時、中央区で月一回無料入浴の日があったので銭湯に行っていました。ある日、その先に「救世軍」の看板があるのに気づきました。京橋小隊(教会にあたる)でした。

ドアを開けると、「よく来てくださいました」と、何とも言えない、やさしい笑顔で女性が迎えてくれました。そんな笑顔は生まれて初めて。お金を払ってもらう笑顔とは全く違いました。中に入ると、支援活動で毎

回、銭湯の入浴券を配っていた初老の男性がいました。そして、奥には、「愛」と話していた背の高い男性も。小隊長(牧師にあたる)でした。今思うと心がすっかり折れている時でしたから、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」(マタイ11章28節)と神様が導いてくれたのだと思います。

その日以来、続けて日曜日に通いましたが、説教を聞くでもなく、ただ座って寝ていました。それでも心が晴れ、落ち着きました。本当に休ませてもらっていたのです。たまに日雇いの仕事があった支援活動に並ぶのを休むとその初老の男性が東京駅近くの自分の居場所を必ず訪ねてくれました。そこまでしてくれることに頭が下がりました。

溢れる涙の経験を通して

小隊に通うようになってしばらくして、救世軍の大きな集会有りました。最後に、イエス・キリストを信じる人は前へ出てお祈りをするようにとの招きがあり、私も前へ出てお祈りしました。自分の座席に戻ると、初めて見る男性士官(伝道者)が、「どちらから来られましたか?」と声をかけてくれました。「京橋小隊

です」と答えた途端、なぜか涙が吹き出て止まらなくなりました。親の死にも涙を流さない自分が、人前で泣いていることに自分で驚きました。その経験から、私の心は変えられました。神様の導きによって、「京橋小隊」の一員としてスタートしたのかもしれない。その後、体調を崩し、生活保護を受けて入院。退院後に救世軍の救護施設に入ることができました。そこから簡易宿泊所を経て、アパート住まいとなりました。

家族との再会

京橋小隊だけでなく、救世軍のいろいろな行事に出るようになってきました。耳が悪いので、全部は聞き取れないのですが、ある集会で、詩編五十一編から、お話があり、「神よ、わたしを憐れんでください」(詩編51編3節)の言葉が深く心に響きました。そして、ずっと連絡も取らず遠ざかっていた田舎に帰ろうと決心しました。節約してお金を貯め、二年後にようやく帰郷。妹には「顔が変わったね。優しくなった」と言われました。



最初の小隊長夫妻と (2006年)

と小隊の近くの公園にいる街頭生活者の世話や、冬の支援活動を継続しています。今、毎日時間をかけて祈ることを大切にしています。「名前を挙げ、また、具体的に声に出して祈る」ことを教えてもらい、やってみると、結構時間がかかりました。今の私の願いは、どんな状況でも、恐れずに、すべてを神様にお任せできる。心境にまで変えていただくことです。(京橋小隊(教会)所属)

イエス様に
変えていただいて



母の祈りに導かれて

喜びと幸いに満ちた生涯

松本悦子



私は、群馬県高崎市に生まれ育ちました。母は熱心なクリスチャンで、その祈る姿は私の脳裏に刻み付けられています。

特に、終戦直後の時のことは忘れられません。当時は食糧難で、街に住む者が食べ物を手に入れるには、着物などを郊外の農家に持って行って物々交換をするしかありませんでした。ある時、母が病気になるなり、兄と私が買い出しに行くことになりました。母は、子ども二人で行かせることを心配し、着物ではなくお金を持たせてくれました。けれど、何軒農家を訪ねても、「着物を持ってこなければダメだ」と、食べ物を持ってもらえませんでした。しょんぼり帰る途中、あぜ道に大きなジャガイモが落ちていたのを見つけました。それを拾い、家を持って帰りました。すると母は、そのジャガイモでスープをつくり、「きょうの糧をお与えください、ありがとうございます」

子どもたちが神様を信じて、曲がらずに成長することを祈っていた母でしたが、私が中学一年の時、天に召されました。召される数時間前、病院に見舞いに行った私に、母は、私が母の連れ子であることを明かし、私に聖書のヨハネによる福音書一四章を示し、「助け主」が来てくださるよう祈った、と話してくれました。

母を亡くしてからは、深い淵の底に突き落とされたような、うつろな日々を過ごしました。同時に、母の言った「助け主」とはどういうものか、考えるようになりました。養父は優しく、いつも見守ってくれましたが、母の言う「助け主」とは異なるように思えました。

は、井戸のそばでイエス様と一人の女性が出会った時の話でした。その中でイエス様がおっしゃった

「この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし……わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」(ヨハネによる福音書4章13、14節)という言葉が心にとまりました。私の暗い心の底に泉が湧き、少しずつ満たされていくような感じを覚えました。それからは、救世軍の礼拝に出席するようになりました。母亡き後の寂しさは相変わらずでしたが、礼拝の時は、明るい水が湧き溢れるように喜びに満たされました。

「我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ」と祈ることができなくなり、十二時近くになり、人を赦すことができな

い自分の罪を自覚し、やっと「主の祈り」をすることができました。その後、私の罪の身代わり主として十字架で死んでくださった主イエス様を救い主として心に迎え、救世軍の兵士(正式に救世軍の信徒となること)になりました。そして、様々な学びや奉仕活動をおこなうようになりました。

「それは、生涯を献げて伝道するようになり、という神様の召しの声です」と教えていただきました。

一九六三昭和38年、私は救世軍の士官伝道者としての歩みを始めました。助けを必要とする人々の声に応える救世軍の士官として、いろいろな経験をしました。ある時は、日本刀を持ってすぐご家庭内暴力の男性の前に立ちはだかつて妻子を逃がしました。またある時は、死に臨み絶望した老婦人とその家族のもとに三日間通い、聖書の言葉から本当の幸いを語りました。翌朝、その老婦人は召されましたが、その顔は微笑んでいて、ご家族から感謝の言葉をいただきました。

現在は、伝道者としての第一線からは退きましたが、母が召される前に、私に与えられるよう祈ってくれた「助け主」は、いつも私と共にいてくださる聖霊なる神様であると信じ、心満たされ、感謝と喜びに溢れた日を送っています。どんな困難に遭っても喜びと希望を失わない生涯を送ることができるのは、この「助け主」によるのです。

残る生涯、この喜びの知らせを一人でも多くの方に伝え続けたいと願っています。(西新井小隊(教会)所属)



西新井小隊のクリスマス子ども会で (写真左端)

ご住所
ご氏名
私の近くの救世軍を紹介してください。
キリスト教についてもっと知りたいです。
「ときのこえ」の購読を申し込みます。

裏、この部分を封書か葉書に貼り、面下の救世軍にお送りください。

創立者 ウイリアム・ブース 大将 アンドレ・コックス (万国本営 英国ロンドン) 日本司令官 勝地 次郎 (救世軍本営 東京都千代田区) http://www.salvationarmy.or.jp

WINDOWS on the WORLD 世界をみつめて

〈西アフリカ〉エボラ出血熱流行地帯支援

昨年春に発生し始めたエボラ出血熱の猛威は、勢いを失わず、11 月末には、リベリア、シエラレオネ、ギニア三カ国で、疑い例を含む感染者が、合計 16,169 人、死者が 6,928 人に達したと発表されました。(11 月 25 日付 WHO 発表)

親の死によって孤児となったり、職場の閉鎖により収入源を失ったり、病气から回復しても復職できないなど、社会の混乱は深刻です。物流の制限もあり、飲食に困る状況も悪化しています。

現地の救世軍は、発生当初から感染予防のための支援と食糧支援をおこなってきました。リベリアにある救世軍の病院では他教会や支援グループからの参加者と共に、病气に対して訓練されたチームを編成し、5,000 人以上の感染者を支援しました。

感染地域で飲料水や食料・衛生用品の物資を配布するボランティアは、住民に接近しないよう、人々に直接会わずに支援物資を置き、後で取りに来てもらっています。また、電話で連絡



安全な水や食料を届ける

を取り続け、精神的な苦痛を取り除く働きもなされています。救世軍はイギリスの本部にエボラ出血熱の監視チームを設置し、週一回現地の報告を受け、対応しています。今後は、孤児や経済的困難に陥った子どもへの教育や生活支援のための働きが必須であると、対策を模索しています。

10 月にはアメリカのオバマ大統領が、救世軍をはじめ、信仰を土台とした支援団体をホワイトハウスに招き、西アフリカのエボラ出血熱流行地帯への支援状況を聞き取り、今後の支援についての話し合いがもたれました。



〈日本〉東日本大震災被災地復興支援レポート (続)

12 月 2 日 (火)、岩手県陸前高田市の高田保育所で、クリスマス会をおこないました。綿菓子やクリスマスの絵本などをプレゼントしました。



翌 3 日には、大船渡市にある非営利型一般社団法人「かたつむり」(就労継続支援 B 型事業所) で、クリスマス会をおこない、フルーツポンチとクリームシチューを一緒に作って食べました。サンタクロースからのプレゼントに、笑顔があふれました。



社会鍋募金へのご協力、ありがとうございました

歳末助け合い募金の社会鍋が、昨年 12 月中旬から年末まで、全国主要都市でおこなわれました。ご寄付くださった方々、またボランティアで奉仕してくださった方々に、心からの御礼を申し上げます。

皆様から寄せられた寄付金は、各地の救世軍小隊を通して、様々な困難を覚えている方々や街頭生活者への支援、また国内外の災害被災者支援などに用いさせていただきます。



昨年、東京タワー入口前でおこなわれた「救世軍クリスマス社会鍋コンサート」

街頭生活者支援ボランティア募集

街頭での給食サービス (調理・配食) にご協力くださる方を募っています。

期間—2015 年 1 月 9 日～2 月 27 日

配布場所—東京・大手町 常盤橋公園など

●お問い合わせは……救世軍本営社会福祉部 TEL 03-3237-0865

救世軍とは



国際的なプロテスタントのキリスト教会で、聖書に示された唯一の神を信じています。そのモットーは、「心は神に、手は人に」で、人々の必要に応えながら神の愛を伝え、物心両面からの救いを目指しています。創立は一八六五年。英国のメソジスト教会の牧師だったウィリアム・ブースが東ロンドンのスラム街で働きを始めました。彼は、当時の社会の最下層にいる人々に神の愛を届けようと、温かい食べ物、清潔な衣類、教育、宿泊所などの提供をおこないました。そして、より多くの人々や社会の必要に応える

ため、統率力と機動力に富んだ軍隊流の組織を取り入れて、全世界にその働きを広げていきました。現在、百二十六の国と地域で救世軍の働きが進められています。どの国においても、創立の精神は脈々と受け継がれています。街頭生活者の支援、厳しい境遇にある児童や女性の保護、高齢者の介護、アルコール依存症者の更生支援、災害被災者の支援などをおこなって伝道しています。また、国際的な協力体制の下、人身売買犠牲者支援や開発途上国の人々の自立支援の推進なども積極的にこなしています。

日本での働きは、一八九五 (明治 28 年) に、ブースによつて派遣された士官 (伝道者) たちによつて始められました。日本人最初の士官となったのは山室軍平です。だれにでもわかりやすい説教と著書で、キリスト教を広めました。そして、失業者への職業斡旋や免状保護、廃娯運動の推進、結核療養所設立など、社会福祉、医療面のパイオニアとして活動してきました。現在は、四十五の小隊 (教会にあたる)、十二の分隊 (伝道所にあたる)、二つの病院 (ホスピス併設、二十の社会福祉施設を通して働きを進めています)。

(取扱支部)

救世軍は、統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、右救世軍にご相談ください。

発行日及び定価

発行日 毎月一日・十五日
定価 一月分 二七〇円 (送料七五円)
振替 〇〇一八〇五四四〇〇

発行所 救世軍本営
印刷所 救世軍本営